

トカラ塾 <http://user.ecc.u-tokyo.ac.jp/~>

報知 龍屋新聞

08007/

かご屋

九州脊梁山地に行く

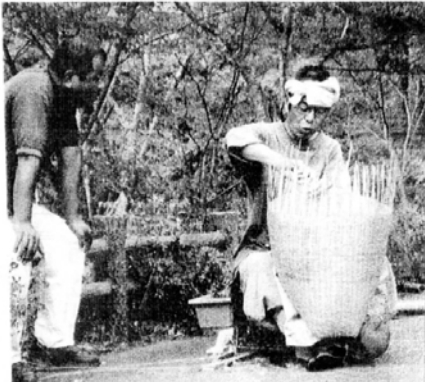


諸塚村

鹿児島市

宮崎県東臼杵郡諸塚村字飯千の
物産販売所前の駐車場。これが写真
に載るカゴ屋の仕事
場である。見物とい
う人は飯千峠を越
えて熊本県から車
で遊びに来た人。カ
ライカゴ(袋背負カゴ)
を編む社主は思わ
ぬ話をこの人から聞い
た。

た。



PHOTO

阿蘇の宮地には旧日本軍の
特攻隊基地があったそうだ。命が
惜しいはあたりまえ。戦走もまま

一 燕川 機として、不時着
された兵が何人もい
たという。

同じ話は鹿児島島の
トカラの島々にもある。
社主の旧居住地であ
る。不時着機と
記録した島の教員



PHOTO 村へ 燕川一

がいて、社主はそれに新たな証言を
加えて、一覽表を持っている。カゴ屋は
居ほがうにして身カゴモノと肥やせる
のだった。

同道の早真家の燕川氏は、諸塚
村内での「駐先仕事」につき合ひ、
その後のトカラ渡りも、あまづに
つき合う。村内では飯千と塚原で
カゴ編みをした。売上金は食料、代
酒、代と温泉入浴料に消えた。

299-2854
千葉県鴨川市
代(だい)623
04-7092-9912
創刊は
たしか、昭和50
年代後半だ。
つまり、1980年
代の前半。44
も、若くは27号。

社告
「南風語」
2010年10月9日(土)
午後3時から
小田急・梅ヶ丘
駅「一・ガラ
「トカラのゼンネ」
燕川一のスライド
橋本氏の
ムービーと
トカラジ(音声)
イキヒ社主の
トーク。オアシス。

島に渡るきつかけになつたものは何であつたか、と人に問ひれた。その初めは「安住の地を求めて島(トカラ)の暮らしを始めた」と人に自分にも言い聞かせていた。そのうち、暮らすの古層に触れてゐるのが心地よかつたから、に変わっていく。どちらでもその時々につづりがない気持ちである。

それが、介(マコト)、「ゆたは、もう、島を卒業しました」と、友人に告げてゐる。何年か前か、つづり、いたオキ火にボツと火が上がり、たよつたものだ。

島は卒業しました、ハイ。(用意せよ)



「安住」であれ「古層」であれ、それが手に入るか否かを、もはや問うてはならない。島を血肉化する行為から足を洗つたといふことである。さらに言い換へると、血肉化と無縁に「古層」を追ひ求めることを止めようとし、自分がある、と言ふことである。未だ続けることをがれたのであり、自分には似つかわぬ。「卒業」して得たものは何であるか。思索と積み重ねられてきた島の歴史

からの解放はむろんであるが、島にたどり着く前の自分の経歴からも放たれたのである。これから、いつでも初心者でいられる。そのとき、島の思想なり、島での自分の経験なりを、いまひとつのそれと対置させることで、兩者を新たな、そして、思いこまぬ新しい角度からながめることができる。

それは、普遍性をもたせるということである。そのためにも、島は安住してはならない。古層を体得してはならない。

普通とは、揺るぎなきミカオ生まるとして、すでに、常識として決めつけられていることからの、ま、直しであり、ときには叛逆と見るがえすことになる。

対置させる、ま、ま、それとは何であるか。例を挙げてみると、島と國家と対置させることができる。そのとき、警官、警察、軍人も備えていない島が、その機能を要請されたとき、島としては、どのような手で打つのか、

それを省察する目線が、新しい角度という意味である。

もう一例を挙げよう。外から島に渡つてきた人と「タビの人」とか、「入り心めん」と呼ぶが、これは再び出て行くことと前提にした人たちと、生涯を島で終える覚悟の人たちがある。前者には教員、行者、布教僧、難破船の乗員などが入る。その人たちのことは、いま取り上げていない。後者に属する人たちの心情は、華僑や難民や故國喪失者などに對置させることができる。

ゼロからの出発であり、島の中心部にはなく、周辺部にたもつする人たちである。その人たちは、島での暮らしか、ま、ちには、分、初心者の、くだり、のなやまを、發揮することが出来る。手垢に染まらぬ、新しい、思考の芽がそこにある。

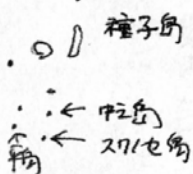
島のコトバで「ミカオ」(頭腦)の良か悪と普通語に對置させること、知識人と、つづりになるが、島の知識人は、必ずとすると、入り心めんや難民や故國喪失者の中から生まれるのかも知れない。水(みづ)に、これからは、島の人の中から、周(まわり)部(ぶ)へ自らを追いやる。入り心めんや「難民」や「故國喪失者」と自認する者も出てくるのである。島は安住する処でもなければ、古層を嗅ぎ取る対象でもない。ま、ま、初心者を自覚し、思想と経験の對置を通じて、新しい、視角を見つげ出す場所である。



PHOTO 荒川健一 フェリーヒシマ 平島港

千四百屯弱の「エリー」としまが平島港に接岸する。前夜の土時過ぎに鹿見島港を出た船が、翌早朝に平島（エノハマ港）に入らなかつた。何となく変りよう。ハミヤ舟による荷役も入用がなかり。荷役は本船のウインチでつり上げたコンテナを山岸におろすだけ。

荒川健一
カゴシマ



奄美大島

尚、弁士のひとりで社まもわります。場所は小島。電鉄の梅ヶ丘ガラ

03-33439333

トカラ塾、トカラに行く

今日は三人で島に獲った。写真家の荒川健一と行く末おもしろい学徒の橋爪大作、それに社主。四泊の滞島であったが、酒宴は六回か七回、重なる。漁師・用澤滋男が毎日またらしてくれる。タイ・イセエビが食卓に並んだ。三人は旧蹟を訪ねまわった。ウヰドゥ、ジイの作小屋、マルセル・モースの贈与の竹やぶ、旧道

イセエビ、マルセル・モースの館などであった。各々の詳しい内容は一月九日の「南國語」の席にゆずることにする。当日は音声（トカラ）とスライドとムービー上映で島をお伝えします。

中島 寄木浜 昭和21年頃の安宿貿易港。遠くは中島の山



PHOTO 荒川健一

平島の北隣りの中之島にも三日滞在した。島で「シヨウ」海遊倶楽部を営んでいる早川主人の世話で、朝食、心配がなげられた。この島の製糖工場が社主は働いていた。昭和四二年（一九六七年）のことである。四十二年の島通いということになる。

萩原延寿 『馬場辰猪』 朝日新聞社 2009年

癖毒書讀

自由民権運動に二十余年の生涯を傾けた馬場は、フィラリアで客死する。明治二十五年(一八八

年)のことだった。官途につく者の多い中で、在野であり続けた意味

を著者萩原は、馬場が異国で綴る日記の中から抽出している。

「……今日、如く人民の困難を為したる時に、政府中即ち治者の位處に居ては、國家の大難と救うは最も難しき事と思ゆるるなり。今日民間の有様を見るに、在野の人物に乏しきなり。余が今知る知の朋友中にも、斯くの如き道理を知りたる人は多けれども、只貪乞と思ふる者と熱心に交しきよりして、断然進退を決する事と能わざるは、其人の為にも國家の為に可悲しむべし……」(一三九頁)

旧友の多くが政府に出仕する官吏になつていった。優秀な人材が政府に吸収されていく事実を、「悲しむべし」としているのは、道徳的な公憤から洩らしているのではない、と萩原は指摘している。

別の書で萩原はこんな引用もしている。「目的なきに等しい努力のみが、よく仕事を成就し、またそれを抑束する」と語つたのは石川淳であった。精神の自由な運動を妨げる一切の呪縛との、不断的戦いに明け暮れた人だから言えるのである。」(「日本知識人とマルクス主義」)



生涯を在野ごとおした萩原。たゞる想いの投影が、『馬場辰猪』から伝わってくる。

「ハエ」

「オの南国語り」

オ二六回 「トカラのゼニボウ」 一月九日(土)

音と映像(スライドとビデオ)と弁舌で

にぎにぎしく披露される「トカラの平島

と中之島 主演…荒川健一(足真家)

橋爪大伴(トカラ塾 編集長) 社主

オ七回 「放送速記録を讀む」 三月六日(土)

平島

会場…ギラリカラ 小田急 梅ヶ丘駅

時間…両回とも午後三時から

もひとつお知らせ
「トカラ塾 新年歌つきの会」 6:00~

梅ヶ丘 歌つきの会 二日(日)

講座は南がなくていいから、飲み

に来て下さい。会費は千円、他は

二三千円か。 HATSUNOUE

中之島東区 温泉



PHOTO ARIMAWA